
H a p p y B i r t h d a y ! !

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Happy Birthday!!

【Nコード】

N1995C

【作者名】

ペロコ

【あらすじ】

今日は、黒羽快斗くんのお誕生日！ということ、お祝い小説です。もちろん、ペロコなりの妄想が混入しています。そして、前駄文「思わぬプレゼント」と微妙にリンクしていますので、そちらを読んだらだと、なお楽しめると思います。

日本特有の季節、梅雨。そんなジメジメした時期に生まれた少年は、カラッとした性格に成長していた。名は黒羽快斗。その少年は現在……

大量の警察官に囲まれていた。

「観念しろ、怪盗キッド！！もう、貴様に逃げ場はない！」と力んで言う警察官に

「ふっ……甘いですよ、中森警部。私を誰だと思っておられるのですか？……怪盗キッドは確保不能の大怪盗。逃げ場が無ければ作るんですよ」

といいつつ、手元から落ちたのは閃光弾。

そのスキにダミーを飛ばし、自分は警察官に早変わり。

「クソッ！逃がすな、追え〜！！！」とダミ声と共にドタバタと出て行った警察官を見送る、1人の警官。……言わずもがな、怪盗キッドその人である。

「さてと……帰るか」と呟き、ダミーとは逆方向へと自分の羽根

を広げ飛び立った。

目指すのは、とあるビルの屋上。予告状の奥深くに自分の中継地点を記すのは、趣味。

「だってなあ・・・ドキドキしてえじゃん？」

と独り言を呟きつつ目当てのビルに到着。

「チエツ・・・今日も外れか・・・」

と本日の戦利品のチエツクを済ませたキッド。

ふと視界の片隅に感じた光。それは、本当に小さな小さな光。

給水塔の下にある・・・「袋？」

袋に付いた蛍光テープ。「何だあ？」とツカツカと近づく。

「？」

中に入っていたのはシンプルな包装紙に包まれた小さな箱と、一枚の紙切れ。メモ。

メモを手に取り、暗闇でも効く目を使い読む。内容は・・・

『Happy Birthday!!

S・K』

「へ？」と思わず声を上げたのは無理もない。その理由は2つ。まず1つめ。これの置いてあった場所。

仮にも普通は人の来ることのないビルの屋上。そんなところにプレゼント（らしきもの）を放置するのは無謀だ。

そしてもう1つは・・・差出人。心当たりが無いわけではない。『

S・K』という人物に。ただ信じられないのは。

「何でオレの誕生日知ってんだ？」

この差出人が自分の思い描いている人だとすると、前者は「彼だし・
・」と納得（というのも変だが）出来る。

ただし、2つ目の謎は・・・と深く考え込んでみる。

まず、自分の思い描いている彼だとすると、ここがキッドの中継地
点だと気づいたはず。

彼にも予告状は回っているだろうし。

となると、このプレゼント（らしきもの）は、オレ宛。

そして誕生日を知っているということは、つまり・・・

「オレの正体、を、・・・知って、る？」

信じたくないが、それだと全て辻褄つじつまがあうのだ。

「・・・マジで？・・・あ、プレゼント・・・何だろ？」

とショックを受けていたはずが突然思い出したように箱へと手を伸
ばす。

ガサガサと音が響く中、箱を開けると、そこに入っていたもの・・・

「タイプピン？」

タイプピンが入っていた。

「おお〜！！！すげえキレー！」と目を細める。

「なかなかいいセンスしてんじゃん？・・・名探偵。さてさて、
お礼を言いに参上しますかね」と嬉しそうに米花町方面へと羽根を
広げ飛んだ。

米花町2丁目21番地。部屋の明かりが1つだけついていることを

確認し、その部屋へと降り立つ。

「そろそろ来ると思ってたぜ？ま、上がれよ」

「……よろしいのですか？」

「そこに立つてられるとオレが困るんだよ」

「……そうですね、お邪魔いたします」

と行儀よく挨拶をし、探偵の家に入る怪盗。妙な凶^えである。

中に入り一言。

「プレゼントありがとうございます。あれ、あなたでしょう？S・

K・さん？」

「……ああ」

と言葉少なに答えるS・K……工藤新一。

突然、消えたと騒がれていた彼は半年ほど前に戻ってきた。そのさらに半年前。大きな闇組織が潰れたことを怪盗は知っている。なぜなら、彼自身も探偵に気づかれぬように援助していたからだ。

3年前、劇的な出会いを果たした少年が、目の前にいる平成のホームズだと知り、何度も対峙してきた。彼との勝負はただ純粹に楽しかった。お互い信頼した上での真剣勝負。

胸の高揚はいつも治まらなかった。

そんな過去を思い出しつつ尋ねる。……おそらく愚問だと思うが、もう、自分の中で結論が出た結果、ここにいるのだし。

「名探偵……お尋ねしてもよろしいですか？」

「何だ？」

「なぜ今日が私の誕生日だと？」

「……黒羽快斗、20歳。東都大2年の人気マジシャン。父親は黒羽盗一……オレの父さんの悪友かつ……名付け親、だよ、

黒羽」

「……ははっ。参った。降参だ。オレのオヤジと名探偵の父親が、ねえ……。そりゃバレるわ。でも何でプレゼントまでくれたんだ？」

「……ちよつとした礼、だよ」

「礼？」

「オメエ、組織の時いたる？あそこ……」

「あらら、バレてたのね」

「あつたりめえだ！気づかねえとでも思ったのか?!」

「バレないように気をつけてたつもりだったんだけど……名探偵の前では無駄だったのかな？」

「探偵なめんなよ!？」

「はいはい、分かりましたよ。今日は礼言いに来ただけだから。マジでサンキュ。あれ、気に入ったよ」

「そりゃよかった」

「じゃな！」

P O M

と煙幕を張り怪盗は夜空へ飛び立った。

後に残された探偵は咳き込みながら、

「わざわざ煙幕張らなくても……」と呟いていたという。

その探偵が『礼』と述べた中に、自分の誕生日に「四つの署名」の初版本をくれた『礼』も含まれていたことは、探偵だけのヒミツ。

そして、次からの怪盗の仕事の際には、きれいな青いガラスの飾りの付いたタイピンがつけられていたらしい。

(後書き)

みなさま、こんにちは。ペロコです。
さっそくですが・・・

Happy Birthday!! 快斗&キッド・・・そして、青
山先生 いつも、楽しませていただきありがとうございます
キッドファンのうちが書かないのはおかしい!!と昨日急に思い立
った駄文です。

自分の作品の中でリンクしているというのは、初の試み。どうなん
ですかね?OKですか?

どうしても、青子ちゃんとの絡みよりも新一との絡みが書きたくて
・・・実は全てバレていたということ(笑)

ライバルであり、いい友人・・・?みたいな関係が理想です。うち
の中では。

ってことで、今日はこれぐらいにしておきます。
また「キッドside」をほったらかしててすみません。頑張りま
すね!!

では、評価・感想などいただけたら嬉しいです
これからよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1995c/>

Happy Birthday!!

2010年10月16日20時16分発行